

第十一講 コリントス戦争と『ヘレニカ・オクシュリンキア』の世界  
— ボイオティアとアテナイ —

ボイオティア

*Hell. Oxy.* XII. 1- 2 :

「以前述べたように、テバイでは市民の間で最良の人々や最も著名な人々 *hoi beltistoi kai gnorimotatoi* が互いに党派を組んで争っていた。その一方をイスメニ阿斯とアンティテオス、アンドロクレイダスが、他方をレオンティアデスとアスティアス、コイラタダスが指導し、レオンティアデス派の人々 *hoi peri ton Leontiaden* はラケダイモンの人々のことを重んじ、イスメニ阿斯派の人々 *hoi peri ton Ismenian* は亡命した民衆派 *ho demos* に対して好意的であったことからアテナイ最良 *attikizein* として評判であった。彼らはアテナイの人々の味方であったのではなく、・・・(以下不明)・・・むしろ企て・・・進んで厄となるようなことをやろうと・・・アテナイ最良と・・・。(2) テバイにおいてはこのような事情でありそれに二つそれぞれの徒党 *hetaireia* が強力であり、しかもボイオティアにおける諸都市においても多くの者が進んでどちらか一方に加担したのであった。その頃と更に少し前にはイスメニ阿斯とアンドロクレイダス派がテバイの人々やボイオティアの人々の評議会で有力であったが、以前 (には) 長いあいだアスティアスとレオンティアダス派が・・・を通じてポリスにおいて抜きん出ている。」

R. J. Buck, *Boiotia and the Boiotian League, 423- 371 B. C.*, Edmonton, 1994.

J. Buckler and H. Beck, *Central Greece and the Politics of Power in the Fourth Century BC.*, Cambridge, 2008.

アテナイ

*Hell. Oxy.* I. 1- II. 2 :

「(I. 1) 同じころ三段櫂船が、民会の承認なしに、アテナイから出航

したが、伝えられているところでは、船長のデマイネトスがこの計画について秘密裏に評議会と相談し、というのは市民の一部が彼と合意していたので、ペイライエウスへと降りて行きドックから船を海へ引き降ろして船出し、コノンの許へ船路を急いだ。(2) しかしその後騒ぎが起り、著名で教養ある人々 *gnorimoi kai charienthes* は怒って国家をラケダイモンの人々との戦争を始めさせるような状況に投げ込んでしまうと言いつたので、驚愕した評議会議員たちはこの事件に関わっていない様なふりをして、叫び声をあげている民衆 *ho demos* を招集したのであった。群衆 *ho plethos* が集まった時に、アテナイの人々でトラシュブロスやアイシモス、アニュトス派の人々 *hoi te peri Thrasyboulon kai Aisimon kai Anyton* が立ち上がって国家をこの非難から免れさせなければ大きな危険を取り上げることになる、と彼らに訴えたのであった。(3) アテナイの人々の中で温和で財産を所有している人々 *hoi epieikeis kai tas ousias echontes* は現状に満足していたのに対して、多数派で民衆派の人々 *hoi de polloi kai demotikoi* はその時恐れを為して、忠告する人々に説得されて、アイギナのハルモステスのミロンの許に人を派して、この事が国家の許可を得て行われたのではないので、デマイネトスを処罰することができることのであった。以前はほとんどいつも彼らは厄介事を画策し、ラケダイモンの人々に反抗していたのである。

(II. 1) というのは彼らは武器や乗組員をコノンの側にある船隊に向けて送り届け、*・p・*クラテスやハグニアス、テレセゴラス派の人々 *hoi peri ・p・krate te kai Hagnian kai Telesegoron* が・・・ペルシア王・・・使節団が派遣されたが、この使節たちを前のナウアルコスのパラクスが捕え、ラケダイモンの人々の許に送付し、彼らはこの人々を処刑したのであった。

(2) エピクラテスとケファロス派の人々はそのことを推進していたので反対した。というのはこの人たちはたまたまポリスを戦争に巻き込もうという非常に強い願望を抱いていたからであるが、ティモクラテスと関わりを持ち資金を手に入れたからというのではなく、ずっと前からそのような願望を持っていたのである。さらに彼から手渡された資金がこの人たちやボイオティアにおける人たち、前に紹介したその他の諸都市における人た

ちををひとつにまとめる原因となったとある人たちは言っているが、彼ら全てにずっと以前からラケダイモン人に対して敵意を抱いており諸都市を戦争に巻き込もうと考えていた事を見ていないのである。というのはアルゴスの人たちやボイオティアの人たち、・・・はラケダイモンの人たちを憎んでいた、その理由はラケダイモンの人々と敵対している市民を味方とみなしていたからであるが、アテナイにおける人たちはアテナイ人を平静と平和から解き放そうと誘導し、国家から金儲けしようと陰謀を企てていたからである。」

B. S. Strauss, *Athens after the Peloponnesian War: Class Faction and Policy 403- 386 B. C.*, London & Sydney, 1986.

トラシュブロス

R. Seager, "Thrasylbulus, Conon and Athenian Imperialism, 396-386 B. C.", *The Journal of Hellenic Studies* 87, 1967, 95-115.

J. H. Robert, *Thrasylbulus and the Athenian Democracy, Historia: Einzelschriften* 120, 1998, Stuttgart.

リュコスの子、ステイリア区。前5世紀末から4世紀初期にかけての政治家。二度にわたってアテナイの寡頭制を倒して民主制を復活させた。エーゲ海北部におけるアテナイの権威を二度にわたって再建している。またペロポネソス人を相手にアテナイを二度にわたって勝利に導いている。前411年から389年にかけての混乱した時期に主要で影響力のある役割を演じた。

ハグニアス

I. A. F. Bruce, "Athenian Embassies in the Early Fourth Century B.C.", *Historia* 15, 1966, 272-281.

反スパルタ派のエピクラテスとケファロス派によって前397年末にテレセゴロスなどと一緒にペルシア王のもとに派遣されたが、アイギナにいたナウアルコスのパラクスによって捕らえられ、スパルタに送られて処刑さ

れた。

エピクラテスとケファロス派

R. A. Knox, “The Athenian Demos and its Treatment of its Politicians 1”, *Greece & Rome* 32, 1985, 132-161.

エピクラテスはアンドキデスと共にスパルタに使節として派遣され講話について交渉したが、帰国後訴えられ処刑された。ケファロスは 380 年代まで政治的に活発に活動した。

J. T. Roberts, “Athens' So-Called Unofficial Politicians”, *Hermes* 110, 1982, 354-362.

I. A. F. Bruce, “The Alliance between Athens and Chios in 384 B. C.”, *The Phoenix* 19, 1965, 281-284.

前 384 年にキオスに派遣され同盟条約を締結した 5 名の使節の一人でもり、アイシモスとともに民主派の指導者として有名。

B. S. Strauss, “Thrasybulus and Conon: A Rivalry in Athens in the 390s B.C.”, *The American Journal of Philology* 105, 1984, 37-48.

エピクラテスとケファロスは民衆派の指導者。

#### 【参考文献】

I. A. F. Bruce, “The Alliance between Athens and Chios in 384 B. C.”, *The Phoenix* 19, 1965, 281-284.

I. A. F. Bruce, “Athenian Embassies in the Early Fourth Century B.C.”, *Historia* 15, 1966, 272-281.

R. J. Buck, *Boiotia and the Boiotian League, 423- 371 B. C.*, Edmonton, 1994.

J. Buckler and H. Beck, *Central Greece and the Politics of Power in the Fourth Century BC.*, Cambridge, 2008.

R. A. Knox, “The Athenian Demos and its Treatment of its Politicians 1”, *Greece & Rome* 32, 1985, 132-161.

- J. E. Lendon, "The Oxyrhynchus Historian and the Origins of the Corinthian war", *Historia* 38, 1989, 300-313.
- K. L. McKay, "The Oxyrhynchus Historian and the Outbreak of the 'Corinthian War'", *Classical Review* 3, 1953, 6-7.
- S. Perlman, "The Causes and the Outbreak of the Corinthian War", *The Classical Quarterly* 14, 1964, 64-81.
- J. H. Robert, *Thrasybulus and the Athenian Democracy, Historia: Einzelschriften* 120, 1998, Stuttgart.
- J. T. Roberts, "Athens' So-Called Unofficial Politicians", *Hermes* 110, 1982, 354-362.
- E. Rung, "Xenophon, the Oxyrhynchus Historian and the Mission of Timocrates to Greece", in Ch. Tuplin(ed.), *Xenophon and his World Papers from a Conference held in Liverpool in July 1999*, Stuttgart, 2004, 413-426.
- R. Seager, "Thrasybulus, Conon and Athenian Imperialism, 396-386 B. C.", *The Journal of Hellenic Studies* 87(1967), 95-115.
- B. S. Strauss, "Thrasybulus and Conon: A Rivalry in Athens in the 390s B.C.", *The American Journal of Philology* 105, 1984, 37-48.
- Ibid., *Athens after the Peloponnesian War: Class Faction and Policy 403- 386 B. C.*, London & Sydney, 1986.